

京都大学地理学談話会

会 報

第25号



2014

[目 次]

寄稿

環境省自然系技官のしごとをしつつ.....	水谷 知生(1985年卒)	1
福島県で働く日々	小野寺伴彦(2000年卒)	3
タイ国チェンマイ便り～都会的で伝統的なライフスタイル～ ...	香川 絵里(2008年卒)	5

秋季地理学談話会の報告 8

＜OB交流会＞ 講師：福井 綾子(2003年卒), 安形 俊太郎(2005年卒)	8
＜講演会＞	
「私の日本人移民史研究」	9
飯田 耕二郎(1969年卒)	

研究室便り 13

＜総合博物館における地図資料等の利用について＞	13
＜外国人研究者～訪問された方～＞	14
＜地理学教室への寄贈図書～2013年度～＞	14
＜研究室の動静＞	17
＜3回生の自己紹介＞	
＜2013年度の実習旅行＞	
＜学部卒業生・院生の進路＞	
＜院生の研究状況の報告＞	
＜2014年度講義題目＞	

事務局から 20

＜地理学談話会2012年度会計報告＞	20
＜計報＞	20
＜住所不明者についてお願い＞	21
＜オープンキャンパス：2013年度の報告と2014年度のお知らせ＞	22
＜2014年度秋季地理学談話会のお知らせ＞	22
＜地理学教室所蔵の写真資料について＞	22
＜「陳列館100年展（仮題）」のご案内＞	23

※表紙写真：2013年12月12日、シモノワグドゼンコ先生の講演会後の立食懇談会(地理学共同研究室にて)

寄稿

環境省自然系技官のしごとをしつつ

近畿地方環境事務所

水谷 知生(1985年卒)

紙面を与えていただいたので、環境庁ー環境省での 20 数年の仕事について振り返りつつ、地理学との接点について少し記してみたい。

私は昭和 61 年に環境庁に当時の試験区分「造園職」（現在は他の職種と統合され「農学Ⅲ」となっている）で採用された。短期間独学だったが試験に受かり職を得たのは幸運であった。環境省には技官が多く、中でも自然系技官と呼ばれる造園、林学職の職員が多い。これは全国の国立公園に現地管理員を配置してきた歴史が長いためである。自然系技官は事務官や他の技官とは別に国立公園の管理や野生生物対策といった「自然系」のものごとを担当する。私も、そのような業務にずっと携わってきた。

ほとんどが農学部出身者の中、文学部卒は「異色」と言われ、地理学専攻だと説明すると、ああ、と少し納得されることが多かった。しかし、国外に出てみると、地理学専攻で国立公園管理にあたっていることに違和感をもたれなかったことが印象的で、わが国の特殊性を感じることもあった。

全国の国立公園のある場所で勤務でき

るという点に興味をもって入ったのだが、実際には入庁して数年の大山、十和田の現地勤務があったものの、その後 10 年以上は霞ヶ関で朝から晩まで打ち合わせ、電話対応、自治体や省庁調整、国会対応などなどで時間が過ぎていった。

そんな中で、国立公園の指定や管理、鳥獣による農林業被害対策、外来種による影響対策など自然系の業務をいくつもやってきたが、いつしか、基本は地図の上で考えるものだ、と気がついた。この業務は国内（時として国外）のどこかで起こっている人と自然との軋轢事象の調整で、地図の上に描く情報もなしに議論しても出口は見えないと感じ、意識的に地図の上で考えるようになったように思う。

国立公園や国定公園といった日本の自然公園は、自然の風景地の範囲をゾーニングして風景の改変行為を規制し、風景を維持しつつ市民に利用してもらう公園であり、公園としての利用と農林業やその他の土地利用との調整が問題になる。これは自然の風景地をめぐる人と人との調整問題である。一方、農林業の場合は、昔から土地や資源をめぐる野生鳥獣との争いの場であって、スキがあれば作物はとられ、農地は蹂躪される。人と野生鳥獣の関係の調整問題である。

どこまで国立公園の区域に含めて規制すれば風景が維持できるかの検討は現場と地図上で考えることであるし、シカ・サル対策は、どこで何がいつ食われたか？シカ・サルの生息範囲は？移動している

か？などなどデータを集めて地図におとし、状況を把握し、場所ごとに対応を考えなければならない。自然環境（土地や資源）を相手にする仕事は地図の上で考えることが多く、地図に描ける程の情報が収集できていないと策もたてられないし客観的に説明ができない、としみじみ感じた。

データをまとめて地図上で考えるにはGISは有効で、個人的に仕事で日常的に使うようになったが、まだまだ職場では普及していない。高価なソフトウェアだけでなく、QGISなど無償でダウンロードして使えるソフトもある。スマートフォンで地図アプリを日常的に使っているのだから、経路検索するだけでなく、仕事も地図の上で考えてほしいものだと常日頃から考え、口にしてしまうのは地理出身者のたわごとだろうか。

ー国立公園のはなしー

最近、世界遺産やジオパークに押され、世間での国立公園の認知度は低下し、職場ではそれを嘆く声も多い。今年は日本で最初に国立公園が指定された昭和9年から80年になる。大正末から昭和初期にかけて、わが国を代表する風景として国立公園の選定が行われた。その原点は何だったのか、時間をみつけて当時の経過を調べている。

昭和初期、内務省衛生局の主導で法制定、公園指定作業が進められ、環境省自然系技官の元祖である造園学者で内務省衛生局保健課の田村剛（「国立公園の父」

とされる）がその作業の中心にいた。しかし、大正末から始まる国の設置する公園の調査には内務省で衛生局と官房地理課が並行してあたっていた。当時、国立公園法（昭和6年成立）はまだなく、史蹟名勝天然紀念物保存法が成立し指定作業をすすめていた。この法律を所管していた地理課が大規模な公園についても調査を行っていた。結果としては衛生局の調査が日の目を見ることになるが、地理課と衛生局の調査の競合が生じた経過、衛生局の調査が生き残った経過は気になっている。

国立公園選定の「前哨戦」であった昭和2年の東京日々新聞、大阪毎日新聞主催の国民的投票合戦になった「日本八景」の選定委員には小川琢治が参加し、「峡谷の部」の選定を巡って上高地を推す本多静六（林学）と、瀬八丁（奈良・和歌山）を推す小川が激論をかわしたことがエピソードとして伝えられている。結果は上高地が一位となり、その後昭和11年に中部山岳国立公園の中核部として指定される。瀬峡も同年に吉野熊野国立公園の河川の風景として指定されるが、昭和2年段階では国立公園候補地には含まれていなかった。国立公園候補地調査を進めていた田村や本多の意図が日本八景の選定に影響したのかもしれない。造園学・林学の影響が大きかったのであろう。

内務省から移管後、厚生省、環境庁と連綿と続く自然系技官の歴史の中で、地理学専攻は、おそらく私を含め3名。国立公園制度の原点を探っていく中で、そ

の点多少複雑な思いもする。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

福島県で働く日々

福島県庁

小野寺 伴彦(2000年卒)

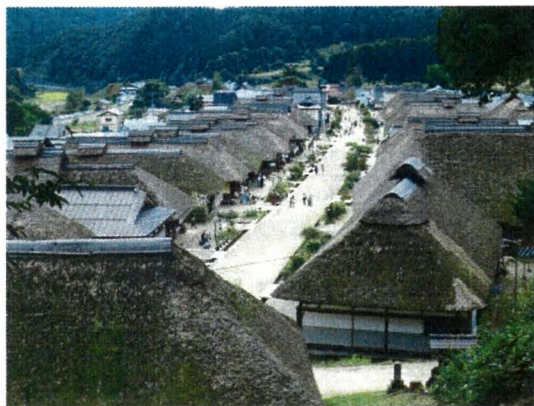
地理学談話会の皆様、お久しぶりです。
また、多くの方々には初めて御挨拶いたします。

京都での学生時代には石原ゼミにお世話になり、卒業後は地元の福島県庁で勤務しています。自転車旅行など学問以外のものに熱中してしまった学生時代、ひとたび働き出してからにはもっと真面目に勉強しておけばよかったと悔やむこともしばしばです。

そんな私も就職してから気がつけば 15 年目 (!) に入ってしまいました。15 年前、「地元地域社会への貢献」と「広い業務内容と地域的な広域性」を含むいくつかの理由で選択した福島県職員の仕事ですが、せっかくの機会をいただきましたので私のこれまで経験した仕事の内容などを簡単にご紹介したいと思います。これから地方行政を目指す方がいれば少しでも参考になれば幸いです。

入庁して最初の仕事は本庁の経理でした。予算・決算や日々のお金の動きなどを通して行政の基本を身に付けたあと、転勤になったところは南会津。降雪量の

多い会津地方でも特に雪深い森林地帯で、神奈川県と同じ面積に当時で 3 万人しか住んでいないという、県内でも特に人口密度の少ない地域です。県出先機関と出向先である下郷町役場での計 5 年間でここで過ごして選挙事務や財政運営などに携わり、過疎地域での行政の役割の大きさを実感しました。またかねて個人的にも関心のあった山村の文化や暮らしにも触れながら、近年知名度が上がっている「大内宿」のような地元の貴重な観光資源をどのように活用し発信していくかにも頭をひねりました。



大内宿

再び本庁に戻った先は土地などの県有財産の処分や利活用を所管する部署で、県が当事者となる裁判や調停案件に対応するため法律も多少勉強し、裁判所にも何度か足を運んでおりました。そんな極めてドメスティックな業務に勤しんでいたある日、突然命じられた新年度からの外務省出向。入庁以来仕事で英語を使うことなど夢にも考えていなかった私にとってまさに青天の霹靂でした。

地方自治体、特に都道府県や政令指定都市は人材育成や人脈形成のためしばしば職員を中央省庁などに派遣しますが、その中で少ないながら外務省というケースもあります（自治体によります）。私は外務省の軍備管理軍縮課で勤務することになりましたが、折しもオバマ米大統領のプラハ演説（「核兵器のない世界」）があり、世界的な核軍縮の気運が一気に盛り上がった瞬間でした。東京での２年間、NPT（核兵器不拡散条約）を中心に各国の思惑がぶつかり合う国際社会のダイナミズムを目の当たりにしたことは地方では得難い経験でした（もっとも、一般の地方行政に直接活かせるかは別として・）。さらに外務省本省勤務のあと２年間は、在ルーマニア日本大使館の広報文化担当として日本文化紹介や情報発信にあたりました。南会津の山村から東京、はてはヨーロッパの片隅まで、地方行政職員としてはずいぶん「振ら幅」の大きい体験をしているとつくづく思ったものです。2014年春に帰国してからは県庁国際課において、県内在住外国人支援や外国要人等来訪対応、国際会議誘致などの業務に従事しています。

2011年３月、ルーマニア勤務が決まり海外赴任の準備を進めていたころ、東日本大震災が発生しました。地震に続いて起こった津波、東京電力福島第一原子力発電所事故。首相官邸の応援に駆り出されたりしながら、刻一刻と危機感を増す原発の状況、そして水素爆発後の放射能拡散状況を見るにつけ気が気ではない日

々が続きました。

その頃福島の特に海岸沿いの被災地では、厳しい冷え込みの中、津波や原発事故から避難した住民の方々が体育館などに身を寄せ合って耐えていました。被災された方々はもちろん、警察、消防、自衛隊や地元役場の方々は本当に大変な思いをされました。そして県もまた個々の職員による夜通しの避難所支援から国や東京電力との調整・折衝等、これまで経験したことのない災害対応に追われました。自治体の究極の責務は住民の生命財産を守ることであり、こうした未曾有の大災害においてその真価が問われます。私は当時偶然にも外部にいたわけですが、行政職員としての気持ちの持ちようについて認識を新たにさせられました。

震災から３年、福島県では今も13万人もの県民が県の内外に避難しています。福島第一原発付近で放射線量が非常に高い「帰還困難地域」では復興に向けた道筋すら見えていないのが現状です。その一方で「八重の桜」効果や国内外からの温かい応援もいただいて県内への観光客数などはかなり回復してきました。県としては、根強く残る放射能に関する風評に対処すべく、米の全量全袋調査や国内外への情報発信など地道にこつこつと取り組んでいるところです。

これから就職する人が行政職を選ぶとしても、世界を相手に大きな仕事のできる国家公務員、住民の顔が見える距離で地域づくりを担う市町村、そしてその間で広域的な観点から地方の活力を支え

る都道府県と、それぞれ性格は違うにしてもどれもやりがいのある仕事であり、国はもとより地方で働く者にもますます積極的な企画力や行動力が必要とされてきます。私も日々反省を繰り返すばかりですが、地方行政を目指す方には広く視野を保ちつつ自分から動くことの意識と、地域への愛着と誇りを忘れないようにしていただきたいと思います。

とりとめのない文章になってしまいましたが、乱筆乱文ご容赦ください。

地域をつぶさに見、理解する眼を養っていただいた石原先生を始めとする先生方、そして地理学に心より感謝いたします。

今後とも福島の歩む道へのご関心と応援をお願いしますとともに、地理学談話会の皆様のますますのご発展をお祈り申し上げます。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

タイ国チェンマイ便り ～都会的で伝統的なライフスタイル～

香川 絵里(2008年卒)

あ、暑い！4月初旬、暑期真っ只中のチェンマイ空港に降り立った途端、むわっとした熱気とタイ料理の独特の香りに包まれた。夫の仕事でチェンマイへ移住することになり、私にとって初めての南

国生活がスタートした。タイの地方都市ということで、「食べ物や水は大丈夫？」

「日本の生活用品なんて手に入らないだろうなあ」と出発前は不安だらけだったが、住んでみると意外と快適。料理はおいしいし、ユニクロやダイソーだってある。ちょっと暑いが、国際色豊かな観光都市かつ、伝統的なライフスタイルを大事にする、とっても魅力的な町だ。



写真：チェンマイの町並み。ランナー王国時代の城壁とお堀に囲まれた美しい都市。

チェンマイ県は首都バンコクの北方約720kmに位置し、面積は日本の四国ほどあり、ミャンマーやラオス、中国の国境に比較的近い。中心部のチェンマイ市は人口約16万人のこじんまりした都市だが、観光業が盛んで外国人観光客が通年

多く、ロングステイヤーや駐在員なども多く住んでいるため、常に人と活気に満ちあふれている。町を歩くとタイ語はもちろん、英語やフランス語、中国語、日本語など様々な言語が飛び交う。通勤ラッシュ時はそこそこ渋滞するし、大型スーパーのレジは大体行列だ。



写真：毎年4月中旬に行われる旧正月ソンクランのお祭り。水鉄砲やバケツやホースで水を掛け合う。

首都バンコクから程よく離れ、またその昔、ランナー王国の首都として繁栄したという歴史的な重要性も相まって、政治、経済、教育などの分野で国が注力しており、タイ国第二の都市と言われている。国際空港があり、日本国領事館もあるので、里帰りやビザの更新がすぐできるのはすごく便利だ。2011年のバンコク近辺での洪水被害以降、洪水の心配が無いチェンマイへの移住者が増え、新興住宅街が郊外に増設されており、まだまだ発展の可能性を感じる。



写真：チェンマイ郊外の新興住宅街。近年建設が進んでいる。

そんな発展目覚ましいチェンマイだが、一方で伝統的な文化を大事にする町でもある。その代表的存在が、チェンマイ近郊の山村に多く住む山岳民族だ。ミャンマーを起源とするカレン族、中国を起源とするモン族、アカ族、リス族など、様々な山岳民族が古くからタイに溶け込み、独自の文化を守りつつ暮らしている。私の夫の家族もカレン族の出身なので、タイでの里帰り先はカレン族の多く住む村だ。カレン族というと、いわゆる首長族が有名だが、カレン族にも「Long Neck」「White Karen」「Red Karen」など色々あり、「White Karen」の多い地元の村には首の長い女性はいない。

カレン族を始めとする山岳民族の多くは、市街地から離れた山岳地帯で、農業や畜産業で生計を立てている。夫の実家近くにも巨大な田んぼや野菜畑、果物畑や牧場が広がっている。近年はタイでも「オーガニック」が流行しているらしく、夫の地元でも無農薬のいちご作り、野菜

作りに取り組む知人がいる。

ただ、20代、30代の若者で農業、畜産業従事者は少ない。夫の兄弟、親戚も公務員、会社員、会社経営、獣医、警官・・・と職業は様々だ。タクシン政権時の農村支援政策の恩恵を受け、奨学金などの支援によって進学率が向上し、大学進学が当たり前になったことが影響している。反対派からは「ばらまき政策」「汚職の象徴」と批判されるタクシンだが、貧困撲滅を掲げて農業経営者への融資、教



写真：首長族の女性。首輪の由来は美の象徴とも、元々は虎に噛まれるのを防ぐためとも言われ諸説ある。

育支援、30 パーツ医療制度（国民が一度に約 90 円の支払いで診察や入院ができる制度）の導入などを行って貧困層の生活向上を後押ししたため、夫の地元も含め、農村部でのタクシン人気は根強い。



写真：いちご畑。チェンマイのいちごは小ぶりだが、とても甘くておいしい！



写真：カレン族の正装。機織り機で自ら手作りする女性も多い。

このように山岳民族出身者も都会に出て働く人が増えているが、どの世代にも共通しているのは民族のアイデンティティを強く持っていることだ。同じ民族同士では独自の言語を話し、宗教を信じ、

生活信条を守り、冠婚葬祭も伝統的な形式で行う。特に、仏教徒の多いタイに居ながらカレン族はキリスト教徒のため、夫も食事前には必ず「〇〇…アーメン」と祈りを捧げるし、義妹は日曜日に時々教会へ行く。そして、山を神聖な存在として敬う。それでいて、タイの国教である仏教にも敬意を表し、大きな選択をする時など「ここぞ!」という時はお寺の僧侶に読経をお願いしたりする。受容力が高いというか、節操が無いというか・・・何だかこの感じ、教会で結婚式を挙げ、神社に初詣に行き、法事やお葬式をお寺にお願いする日本に似ているなあ、と思う。



写真：カレン族出身者の結婚式の様子。写真の衣装は北部タイ様式だが、キリスト教徒のため、牧師が進行する。

チェンマイへ引っ越して約 1 ヶ月。インターナショナルな町の雰囲気と、広大な田園風景の広がる山村での伝統的な暮らしの両方を楽しめるチェンマイの魅力に、早くもととりつかれている。親日家が多く、常に暖かい（暑い?）ので、セカンドライフを楽しむ日本人のシルバー世

代が多く住むのも納得の居心地の良さがある。もちろん、嫌なことも日本人として譲れない部分もあるし、これからもっと経験するはずだが、ぎりぎり 20 代、「まずは受け入れてみる」ことをモットーに、色んな経験を積んでいきたい。目下の目標は、タイ語と少々のカレン語を習得することだ。

→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

秋季地理学談話会の報告

2013 年 11 月 16 日、文学部新館の第 7 講義室と地理学実習室、共同研究室で、秋季地理学談話会を開催し、卒業生や在学生の皆様が参加されました。講演をしてくださった飯田耕二郎氏（1969 年卒）や、OB 交流会で講師を務めてくださった卒業生の方々に厚く御礼申し上げます。

OB 交流会と講演会の報告をします。

<OB 交流会>

卒業生の福井綾子氏（ネスレジャパン、2003 年卒）と安形俊太郎氏（DENSO、2005 年卒）のお二人が講師を務めてくださいました。在学当時の思い出や社会に出るまでの体験、社会に出てからの歩みなど、エピソードを交えながら、アドバイスだけでなく温かい励ましの言葉もいただきました。活発な質疑や意見交換があり、楽しい交流の機会となりました。



OB交流会の様子

講師の方々と司会者（朝倉 慎人氏（D2）と古田祥未氏（4回生））との間で打ち合わせして、進行内容も企画していただきました。ありがとうございました。



懇親会にて

<講演会>

「私の日本人移民史研究」

飯田 耕二郎（1969年卒）

久しぶりに京都大学を訪れ、若い人を相手にお話をさせていただく機会を得た。

私が学生時代にはこの談話会などで偉い先生のお話を聞いた覚えがありますが、まさか自分がこのようなところでしゃべる立場になるとは夢にも思いませんでした。あまり大した業績を挙げていないにもかかわらず、地理学教室からお話があって驚きましたが、出来の悪い卒業生の苦労話もたまにはよいかもしれないと思い、お引受けすることにしました。

私の略歴と地理学における従来の日本人移民史研究の概要を述べた後、本題である研究歴などについて以下のように紹介しました。

1. 研究歴

1969年に卒業しましたが、卒業論文は「伯耆大山の開拓村」というもので、もともと開拓地や移住地に関心がありました。これは『人文地理』の研究ノートとして掲載されました。修士論文は「集落形態と社会組織」というテーマで仕上げましたが、出来が良くなって修了後しばらく大学院の聴講生をしながら同志社中学・女子中学の講師をしました。その時期、甲南大学の久武哲也氏とフィリピンに2度、調査に行きました。途中で別れ私はミンダナオ島のダバオに赴き戦前日本人がやったマニラ麻栽培について調べました。これについては人類学研究会で報告したことがあります。ペーパーにしないままでした。

1974年に木下良先生の後任という形で、窪田哲三郎先生のお世話で同志社女子中学・高等学校の教諭になりました。

就職した 1 年目の夏に私の兄がカナダのオタワにいたので、夏休みにバンクーバーからバスで大陸横断して訪ねていきました。そこでカナダやアメリカなど大陸に渡航した移民に興味がでてきました。しかし 1 年目からクラブ顧問や担任などの校務で、休みも思うように時間が取れず自分の研究どころではなくなりました。そして結婚さらに子育てなどで、勉強できる状態でなくなりました。しかしアメリカのカリフォルニア州の日本人移民のことなどについて自分なりに少しずつ資料を集めていました。その頃、窪田先生と私で地理の授業を担当しましたが、多すぎる授業時間数を埋めるために京大から大学院生に非常勤で来てもらっていました。いま地理の学会で活躍されている先生方が多くおられます。このように京大の近くにいて、また後輩の院生との関係を持ち続けていたことも、私にとって研究意欲を失わずに続けることができたプラスの要因だったかもしれません。カリフォルニア移民の延長でテキサスの日本人による米作について調べていた時に、たまたま外務省通商局の『移民調査報告』という資料に、初期の米作者で、同志社社長であった西原清東や日本の労働運動の創始者の 1 人である片山潜などと共に、星名謙一郎という名前を見つけました。その珍しい姓のために、同志社女学校の創始者の新島八重や有名なデントン先生の世話をした星名ヒサの夫で元同志社大学の学長であった星名秦の父親であることが分かりました。同志社に関係があると

ということもあって、西原清東とともに、彼について調べていくうちに、彼はテキサスのみならずハワイやブラジルでも移住生活を送っていたことが分り大変興味深く思い、彼について調べて見ようと思いました。

同志社に就職して 10 年ほど経ち子育てが一段落した 1983 年、たまたま勤務先の近くの同志社大学人文科学研究所で「海外移民ならびに海外伝道に関する研究」という共同研究が始まりました。当時私の関心テーマにぴったりでこの研究班に参加しました。代表者は人文研の教授で杉井六郎先生でした。先生は日本近代史の専門で、大河ドラマ「八重の桜」に登場する熊本バンドの研究で有名な先生です。もと同志社高校の先生で、高校の教師が研究活動をすることに理解を示され、歴史研究で一次資料を見ることの大切さを教えてくれた私にとって移民研究での一番の恩師です。移民研究は当時、日本でほとんど未開拓の分野で、月 1 回の研究会では活発に議論しあい、楽しくそして様々な研究者から影響や刺激を受けた時期です。京大の学生時代は残念ながら自分自身の研究目標があいまいで、あまり熱心に勉強したとはいえません。それはともかくこの研究班で私は先ほどの星名がハワイにいたときに、同志社出身でハワイに渡ったキリスト教の伝道者について調べました。先ほどの熊本バンドに続く同志社神学部の卒業生が国内だけでなく海外にも伝道で出かけたが、その実態がよくわからなかったのがこれについ

て調べました。同志社での研究会の他に、その頃からいくつかの移民に関する研究会が始まっていました。津田塾大学での女性研究者を中心にした研究会や東京経済大学での田村紀雄先生を中心とする海外の日系新聞を中心にした研究会などです。そのうち田村先生の研究会がトヨタ財団の援助を受けて、その報告会が東京で行われると聞いたので、どうしようかと迷ったのですが、思い切って出かけました。ここでカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）におられた阪田安雄先生やユージ・市岡先生などと顔見知りになりました。1986年には学校から3カ月の休暇をもらってまずUCLAに1ヶ月余り行きました。ここでは地理教室の先輩で、前号に寄稿文を寄せられた陳芳恵さんが住んでおられ、また関学大からサバティカルで来ておられた山本剛郎先生にお世話になりました。その後ハワイ大学に行き、ここではエスニック研究で有名なフランクリン・王堂先生（現在はスミソニアン研究所におられる）や同志社大学出身の松井正人先生に世話になりました。この調査旅行で現地の資料を実際に閲覧できて、研究の視野を広げることができたのは非常に有益だったと思います。1989年には、同志社の研究会に来ていた東京の森村商事の人の紹介でフィランソロフィー研究会に出席させてもらったところ、大学時代に下宿が一緒に当時サントリー財団の事務局長をしていた伊木稔さんに出会い、研究助成を申請してみないかと言われ「ハワイにおける日系

人社会とキリスト教の変遷」というテーマで応募したところ、運よく助成金の100万円がもらえ、それでメンバーとハワイに調査旅行に出かけて報告書を出したことがありました。この頃からキリスト教の伝道だけでなくハワイの日系人社会の変遷に興味を持つようになりました。1991年頃に同志社での移民の研究会は『北米日本人キリスト教運動史』という本を出版して終わりましたが、続いて同じ人文科学研究所で沖田行司教授を代表とする共同研究「多民族社会における異文化交流と社会構造の変容に関する研究」のハワイ班に参加しました。この研究会には久武氏に加わってもらい、一緒にハワイに調査に行きました。ここでハワイの日系人について私の本来の専攻分野である地理学の立場から考察しようと思い始めました。1994年には雑誌の『人文地理』に「ハワイにおける日本人の居住地・出身地分布—1885年と1929年—」というレポートを投稿しました。また同志社の研究班からはナカニシヤ出版から『ハワイ日系社会の文化とその変容—1920年代のマウイ島の事例—』という本を出版して終わりました。

1995年に大阪商業大学に職を得てから大阪のことにも興味がでてきて、移民関係では大阪を本拠とした移民会社のことを調べ大学の紀要に掲載したりしました。5年目の2000年には運よく大学の海外研究員制度を利用して1年間、家族と共にハワイ大学の日本研究センターに客員研究員として滞在することができました。

滞在中は歴史学部のジョン・ステファン先生にとくにお世話になりました。先生は「HAWAII UNDER THE RISING SUN」日本語訳で『日本国ハワイ』という本を出版され、第二次大戦中の二世などの活動についての研究をしておられる先生です。私は1年間自由にハワイ各地の資料を収集して回りました。帰国後は集めた資料をもとに大学の紀要や歴史地理学会で発表しました。2003年には副学長の勧めもあり、大学の出版助成金を利用してこれまで書いた論文をまとめる形でナカニシヤ出版から『ハワイ日系人の歴史地理』という本を出しました。この本はハワイ諸島全体の日系人について書いた本で、中心都市ホノルルについてはほとんど触れていなかったもので、そのことが気になり、その後、大学の紀要にホノルルに関するレポートを掲載し、それらを集めて2013年3月に再び出版助成金をもらい同じナカニシヤ出版から『ホノルル日系人の歴史地理』という本を出すことができました。

学会関係では、現在は人文地理学会と歴史地理学会に所属していますが、あまり熱心に出席していません。しかし1991年に始まった日本移民学会には創立当初からほとんど毎年、参加しています。この学会は先に紹介した同志社と津田塾と東京経済大学のメンバーが中心となり、UCLAにいた阪田先生が日本に帰って大阪学院大学に来られるのをきっかけに始まった新しい学会です。私は創立当初から運営委員として参加し、最初は事務局

次長、2005年からは事務局長を勤めました。現在は400人程のメンバーで、主なメンバーは大体顔見知りです。関西でも移民の研究会をやっておりマイグレーション研究会という名称です。現在私が会長で立命館大学の河原典史氏に事務局をやってもらっています。年に5回、大体2か月おきに関西の大学を持ち回りでやっています。地理学や歴史学、社会学、文学、音楽や芸能など様々な分野の人が移民を対象に研究していて、けっこう面白くて刺激になります。

大学の定年退職まであと1年で、今は自分の研究のきっかけとなった星名謙一郎の生涯をまとめる作業をしています。出来るだけ早くもう1冊、星名に関する本を出版したいと思っています。せっかく30年ほどかけて集めた資料を無駄にしたいくないし、年をとるとだんだんやる気が失せてくる恐れがあるからです。ブラジルにもこれまで8回ほど行ったのでブラジルの日系人の歴史も出来たら書きたいと思っています。

2. まとめ～これまでの自分の研究で得た教訓

国内の和歌山市民図書館の移民資料室や東京の国会図書館の憲政資料室、外務省外交史料館など、またハワイ大学ハミルトン図書館やUCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）のResearch Libraryなどアメリカの移民史料の所在地を紹介した後、まとめとして若い研究者に少しは参考になるかもしれないと思い、次の

ようなことを述べて締めくくった。

1. Only One をめざす～なるべく人がやらないことを見つける
多くの人がやっている中で Best One になるのはむつかしいので、未開拓の分野を探す
2. 継続は力なり～目移りせずに 10 年以上は続ける
永續きをさせるためには楽しくやること、とくに歴史研究は蓄積がものをいう
3. 研究会などには積極的に参加する～人的ネットワーク・情報交換は重要
「やるかやらないかを迷った時はやる方を選択」大商大の学長の言葉
4. 一次資料や現地にあたる～フィールドワークは大切
移民関係の書籍などでは人名など孫引きで間違いが非常に多い。なるべく対象とする年代に近い文書、年鑑、住所・人名録、新聞（広告）記事、地図（Insurance Map など）で事実関係を検証する。また現地に出かけ現状を確かめ関係者の話などを聞く
5. 完璧を求めるな～最初から完全なものを目指すとは完成は困難
不完全でも経過報告として書いてまとめると足りないところが課題として見えてくる



講演会

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

研究室便り

＜総合博物館における

地図資料等の利用について＞

地理資料部門の助教は 2008 年度より不在が続いておりますが、当面の代替措置として、地理資料担当の教務補佐員に地図・地理資料の管理にあたってください。勤務日：火～金、勤務時間：9:00 - 17:00（除く、昼休み）

総合博物館地理資料部門に収蔵されている地図資料等の閲覧・撮影などを希望される方は、お手数ですが、下記の窓口までご連絡のうえ、所定の手続きをお取りくださいますよう、お願いいたします。

京都大学総合博物館 事務室

電話：075-753-3272

＜外国人研究者～訪問された方～＞

2013 年 11 月 19 日から 2014 年 1 月 17 日まで、エカテリナ・シモノワグドゼンコ (Ekaterina Simonova-Gudzenko) 教授 (Institute of Asian and African Studies, Moscow State University (ロシア)) が教室に滞在され、中世後期から近代における日本の地図学史および地理的表現の発達について、調査研究を行われました。また、12 月 12 日には、地理学実習室において、「18 世紀初頭にロシアで公刊された最初の日本列島の地図およびその元となった諸資料」と題して、講演も行われました (ロシア語－日本語通訳付き)。

＜地理学教室への寄贈図書

～2013年度～＞

昨年度、地理学教室にご寄贈いただいた図書の一覧です (雑誌・定期刊行物等は除く)。寄贈くださいました方々に厚く御礼申し上げます。これらの図書は、文学研究科図書館または地理学共同研究室に配置し、学生ならびに教室スタッフの研究・教育に活用させていただいております。

過去にいただいた図書も含めて、これらの寄贈図書は、皆様にもご利用いただけるようにしておりますので、どうぞご活用ください。

(図書)

・古地図・絵図 田中啓爾コレクションの世界／立正

大学熊谷図書館 (DVD付)

- ・ *Culture allo specchio Arte, letteratura, spettacolo e societa trail Giapponne el'Europa*
- ・ 商品化する日本の農村空間／農林統計出版
- ・ 歴史研究の最前線15 今、なぜフィールドワークなのか／総合研究大学院大学文化学研究科
- ・ 測天量地一測量の源流を尋ねて歴史を遡る地図づくりに精魂を傾けた男達／清和出版
- ・ 改訂版 首都圏地域研究：空間認識と 対応政策／서울大學校出版部
- ・ 動物地理の自然史：分布と多様性の進化学／北海道大学図書刊行会
- ・ <東アジア内海文化圏の景観史と環境 1> 水辺の多様性／昭和堂
- ・ <東アジア内海文化圏の景観史と環境 2> 景観の大変容：新石器化と現代化／昭和堂
- ・ <東アジア内海文化圏の景観史と環境 3> 景観から未来へ／昭和堂
- ・ *Latvija* ラトヴィア ヨーロッパ中央の緑の楽園
- ・ *Nature and Antiquities in Al 'Ula Province*
- ・ 原発と活断層「想定外」は許されない／岩波書店
- ・ 東日本大震災における地理空間情報の取得と活用／日本地図センター
- ・ 活断層大地震に備える／ちくま新書
- ・ *The 8th Japan-Korea-China Joint Conference on Geography Program and Abstract*
- ・ *IGU 2013 Kyoto Regional conference* / 2013 年京都国際地理学会議
- ・ 政治・空間・場所：「政治の地理学」にむけて【改訂版】／ナカニシヤ出版
- ・ アウトバーンとナチズム：景観エコロジーの誕生／ミネルヴァ書房
- ・ 統合知の形成をめざして：地球研研究推進戦略センター 5 年 6 か月の軌跡／総合地球環境学研究所

- ・大阪府立狭山池博物館 平成 25 年度特別展 近世狭山池の水利変革—番水と水利技術—
- ・世界の宗教と人口／原書房
- ・ *Coastal Ceomorphology and Vulnerbility of Disaster towards Disaster Risk Reduction*
- ・地域分析：データ入手・解析・評価／古今書院
- ・ホノルル日系人の歴史地理／ナカニシヤ出版
- ・来日留学生の体験：北米・アジア出身者の 1930 年代／不二出版
- ・ *La geografia contemporanea y Elisee Reclus / Guenola Capron / Publicaciones de la Casa Chata / El Colegio de Michoacan*
- ・生き物文化の地理学／海青社
- ・アメリカ合衆国水法への招待／日本評論社
- ・日本の火山地形／東京大学出版会
- ・〈領域化〉する空間：多文化フランスを記述する／九州大学出版会
- ・ *Geography of Religion in Japan / Springer*
- ・労働の経済地理学／日本経済評論社
- ・第二屆復旦大学-京都大学 東アジア人文研究博士課程学生検討会 討論提要
- ・自然と人間の環境史／海青社
- ・市町村合併の時代/中山間地域の産業振興／新評論
- ・自治鳴動（まちむらがうごく）：平成大合併の現場から／ぎょうせい
- ・市町村合併で「地名」を殺すな／洋泉社
- ・村が消えた：平成大合併とは何だったのか／祥伝社
- ・平成の大合併県別市町村名事典／東京堂出版
- ・Q&A 市町村合併ハンドブック 第 3 次改訂版／ぎょうせい
- ・平成大合併と広域連合：長野県広域行政の実証分析／公人社
- ・市町村合併の幻想／自治体研究社
- ・「構造改革」と自治体再編：平成の大合併・地方自治のゆくえ／自治体研究社
- ・「平成大合併」の財政学／公人社
- ・市町村合併の時代—中山間地域の産業振興／新評論
- ・第 56 回歴史地理学会大会 歴史気候学セッション 論文集
- ・2013 年度特別展 絵葉書 そのメディア性と記録性／和歌山大学奇襲経済史文化史研究所
- ・富士山 世界文化遺産登録記念 特別展 鳥の目で見えた富士～鳥瞰図の世界～／富士市立博物館
- ・第 45 回企画展 村絵図を歩く／富士市立博物館
- ・ *Annals of the NATIONAL ASSOCIATION OF GEOGRAPHERS, INDIA* (雑誌)
- ・茨城地理 第 14 号
- ・エネルギー史研究 no. 28 (九州大学)
- ・えりあぐんま 第 19 号 2013
- ・エリア山口 第 43 号 2014.2
- ・沖縄地理 第 010-12 号
- ・オーストラリア研究紀要 第 39 号（追手門学院大学オーストラリア研究所）
- ・お茶の水地理 第 52 号
- ・外邦図研究ニューズレター No.10
- ・海洋地質図 no. 79 (CD) 野間岬沖表層堆積図
- ・海洋地質図 no. 80 (CD) 奥尻島北方表層堆積図
- ・海洋地質図 no. 81 (CD) 日高舟状海盆表層堆積図
- ・海洋地質図 no. 82 (CD) 奥尻海盆表層堆積図
- ・学術研究助成報告集 国土地理協会
- ・観光科学研究 第 7 号 (首都大学東京都市環境科学研究科)
- ・関西学院史学 第 41 号
- ・京漁連だより 第 436-437 号
- ・京都府立大学文化遺産叢書 第 6 集 城陽市域の地域文化遺産

- ・京都府立大学文化遺産叢書 第8集 石見銀山城の歴史と景観
- ・京都府漁協だより 第1-2号
- ・空間・社会・地理思想 第16号
- ・熊本大学地理学研究 第5号
- ・現代インド研究 空間と社会 Vol. 3
- ・国士舘大学地理学報告 no. 21
- ・駒澤地理 第49号
- ・しま no. 233-234
- ・首都大学東京大学院都市環境科学研究科 地理学教室年報 2011年度/2012年度
- ・条里制・古代都市研究 通巻17-26号
- ・人文学部紀要 第33号 神戸学院大学人文学部
- ・人文地理学研究 33 (筑波大学大学院生命環境科学研究科)
- ・石炭研究資料叢書 no. 34 (九州大学)
- ・地域学研究 第26-27号(駒澤大学応用地理研究所)
- ・地域研究 vol. 53-54 (立正地理学会)
- ・地域研究年報 35 (筑波大学人文地理学・地誌学会)
- ・地域と環境 No.12 特集 金坂清則先退任記念特集号
- ・地域と社会 第16号 (大阪商業大学比較地域研究所)
- ・地學雜誌 vol. 122, no. 2-6, Vol. 123, no. 1
- ・地図情報 vol.33 no.1-4
- ・地理 5-12月号(vol. 58), 1-4月号(vol. 59)
- ・地理学研究 第41号(駒澤大学大学院地理学会)
- ・地理学評論 7, 9, 11, 1, 3月(vol. 86 - vol. 87)
- ・地理学研究 60-62(香川大学教育学部地理学研究室)
- ・地理學報 37 (大阪教育大学地理学教室)
- ・地理学報告 第115号 (愛知教育大学地理学会)
- ・地理研究 21号 (法政大学大学院)
- ・地理誌叢 第54巻 第2号, 第55巻 第1号 (日本大学地理学会)
- ・地理歴史人類学論集 4号 琉球大学法文学部人間科学紀要別冊
- ・東北学院大学論集 歴史と文化 第49-51号
- ・東北大学理科報告 第7輯(地理学) vol. 59-60
- ・東北文化研究所紀要 第45号
- ・砺波散村地域研究所研究紀要 第30号
- ・奈良大地理 第19号
- ・人間科学 第29-30号(琉球大学法文学部人間科学科)
- ・日本海地域の自然と環境 第20号(福井大学地域環境研究センター)
- ・人間文化 H&S 31-33(神戸学院大学人文学会)
- ・法政地理 第45号
- ・文化史學 第69号(同志社大学・文化史学会)
- ・待兼山論叢 日本学篇 47
- ・山形大学紀要(社会科学) 第44巻第1-2号
- ・立命館地理学 25
- ・歴史人類 第41-2号 (筑波大学大学院人文社会科学科学研究科)
- ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 no.23-24
- ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊第20号-2
- ・早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊第21号(1-2)
- ・2012 JAPANESE PROGRESS IN CLIMATOLOGY (法政大学気候学談話会)
- ・AFRICAN STUDY MONOGRAPHS vol. 34 no. 2-2
- ・AFRICAN STUDY MONOGRAPHS Supplementary Issue no.45-46
- ・ASIAN AND AFRICAN AREA STUDIES no. 12-2, no. 13(1-2) (京大 AA 研究科)
- ・GEOGRAPHICAL REPORTS OF TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY No.48

- ・ *SOUTHEAST ASIAN STUDIES* vol.2 no. 1-3
- ・ *Southeast Asian Studies* 東南アジア研究 vol. 51, no. 1-2
- ・ *Tsukuba geoenvironmental sciences* vol. 8

(報告書)

- ・ 地域調査報告 15 2012 島根・鳥取 (九州大学文学部地理学研究室)
- ・ 地域調査報告 16 2013 高松市・小豆島 (九州大学文学部地理学研究室)
- ・ 2012 年度 地域調査実習報告書 「広島・神奈川」 (金沢大学人文学類地理学教室)
- ・ 2012 野外実習報告書: 事業体による激甚災害支援のあり方について～宮城県登米市・栗原市～津波被害からの商店街復興～宮城県南三陸町～ (東北大学理学部地圏環境科学地理学教室)
- ・ 文化遺産としての幕末蝦夷地陣屋・困郭の景観復原 — GIS・3次元画像ソフトの活用 平成 22～25 年度科学研究費 補助金 (基盤研究 B) 研究成果報告書 (その 2) (研究代表者: 戸祭由美夫)
- ・ 『福島県郡山市のブランド米: その生産, 利用, 加工, 連携, 販売, 宣伝』 (公立大学法人首都大学東京都市環境学部地理環境コース 2013 年大巡検報告)
- ・ 2013 年度 地理学実習 現地調査報告書 今帰仁村 (京都府立大学文学部歴史学科文化遺産学コース)
- ・ 和東町湯船区 調査報告書

<研究室の動静>

教室の事務は, 引き続き三上純子さんをお願いしております。

本年度は, 大学院博士後期課程 2 名, 修士課程 4 名, 学部 4 回生 14 名, 3 回生 9 名, 研修員 1 名が在学中です。

<3 回生の自己紹介>

本年度は, 新たな顔ぶれとして, 3 回生 10 名を迎えました。皆さんに簡単に自己紹介していただきます。

(3 回生)

岡田 眞太郎

岡田眞太郎です。2012 年 10 月から一年間休学して, 世界一周旅行に行っていました。変なタイミングで休学したので単位が全然足りていないです。ご協力お願いします。そして, これからよろしくお願いします。

猪原 章

3 回生の猪原章です。出身は大阪府の和泉市です。だんじりが有名です。出身高校は奈良県の西大和学園です。陸上競技部に所属して毎日走っています。ビールが大好きで, ドイツに行きたいと常々思っています。余談ですが, 日本酒も大好きですが, 焼酎は無理です。

太田 紘子

3 回生の太田紘子です。兵庫県神戸市出身です。調べたいテーマはまだ具体的に決まっていますが, 住んでいる町が海の近くということもあり, 港などの沿岸部の開発や海上貿易に興味があります。地理を通じて自分の知っている極小の世界を少しでも広げたいです。

桑林 賢治

桑林賢治と言います。大阪府南部, 泉

州地方の出身です。高校の地理の先生がおもしろくて地理学に興味をもつようになりました。音楽とダンスが趣味ですが、そちらにばかり没頭しすぎず、勉強の方もしっかりやっていく予定ですのでよろしくお願いします。

小柴 藍子

3回生の小柴藍子です。高校時代担任兼地理担当だった先生に影響されて地理が好きになり、地理学専修を選びました。地図を眺めているとわくわくします。本当に分からないことだらけで所々で迷惑をおかけすると思いますがよろしくお願いします。

末岡 奈緒子

3回生の末岡奈緒子です。岡山県総社市出身で、高校は広島大学附属福山です。鉄道の旅をするのがわりと好きです。院生の熊野さんと同じサークルでカーリングをしています。好きな球団をカーブにしていこうと思っています。どうぞよろしくお願いします。

谷本 沙織

谷本沙織です。岡山県倉敷市出身で、高校は広大附属福山です。海外旅行が好きで、今年の春はイタリアに行ってきました。フィレンツェがすごく素敵でした。サッカーも好きです。よろしくおねがいします。

中島 柚宇

地理学には以前から漠然とした興味があり、2014年現在、その興味は募る一方です。単位取得率は低いですが、志は高いです。自分が今立っているこの地球について、もっともっと知っていきたいです。よろしくお願いします。

堀川 泉

今年より地理学研究室に入りました堀川です。幼少の頃から世界各地の生活文化に興味があり、最近では、アルバニアや旧ユーゴの国々に関心を持っています。本当に未熟者ですが、どうぞよろしくお願いします。

益田 天朗（休学中）

〈2013年度の実習旅行〉

2013年度は、10月21～24日まで、岐阜県美濃加茂市において、2回生・3回生の計8名が調査を行い、報告書を作成しました。

〈学部卒業生・院生の進路〉

* 学部卒業生

石見 瞭	三菱電機（株）
片山 さゆみ	中日新聞社
熊野 貴文	文学研究科修士課程
梶田 剛	住友生命相互保険（株）
久木 智裕	（独）国立病院機構
古田 祥未	（株）フォンテーヌ・ブロー

＊ 修士課程

芦田 真隆 兵庫県立柏原高等学校(非常勤講師)
林 良彦 東京都庁

〈院生の研究状況の報告〉

今年度までの院生の研究状況を報告します。以下は、閲読を経た論文のリストです。

D 3 網島 聖

- ・明治後期地方都市における商工名鑑的「繁昌記」の出版—山内實太郎編『松本繁昌記』を事例に一, 史林, 93-6, 119-144 頁 (2010)
- ・近代における同業者町の存続とその意義—明治・大正期の大阪道修町と医薬品産業を事例として一, 人文地理, 64-2, 123-141 頁 (2012)
- ・戦間期の同業者町における取引関係と「調整」の変化—1914～1940年の大阪・道修町の医薬品産業を事例に一, 地理学評論, 87-1, 38-59 頁 (2013)

D 3 朝倉 慎人

- ・生活空間への観光のまなざしと住民の対応—徳島県三好市東祖谷地区を事例として一, 人文地理, 66-1, 16-37 頁 (2014)

〈2014年度講義題目〉

＊講義(系共通科目)＊

小林致広・石川義孝 人文地理学概説

＊特殊講義＊

教授 小林致広 土地、資源、領域をめぐる地理学
教授 石川義孝 人口減少時代の日本における地理学的課題の検討
教授 田中和子 空間行動に関する分析とその諸問題
准教授 米家泰作 知と表象の歴史地理学
人環教授 小島泰雄 中国農村の生活空間研究(前期)／中国における都市農村関係(後期)
地球環境学堂教授 小方 登 地理情報・衛星画像の処理・分析の基礎(前期)
AA 研准教授 大山修一 アフリカの社会と環境(前期)
AA 研准教授 水野一晴 世界の自然環境と人々の暮らし(前期)
理学研究科准教授 堤 浩之 地形学(学部)(後期)
講師 香川貴志 カナダ都市の地誌的研究(前期)／都市防災をめぐる実践的研究(後期)
講師 福田珠己 自然の地理(前期)／ホームの地理(後期)
講師 山下清海 海外の華人社会と中国(前期・集中)
講師 篠田雅人 乾燥地の気候変動と遊牧社会の持続性(前期・集中)
講師 星田侑久 GISの基礎(前期・集中)／GISの応用(後期・集中)

※(演習／20世紀学科目と共通)

客員准教授 上杉和央 戦争の記憶の現在(前期)／20世紀へ

のアプローチ～景観調査を通じて～（後期）

＊演習Ⅰ—地理学研究法—＊

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

＊演習Ⅱ—4回生演習—＊

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

＊講読＊

教授 小林致広 英語地理書講読

教授 田中和子 ドイツ地理書講読

文学研究科教授 小山 哲 フランス

地理書講読（前期・後期）

人文研助教 山崎 岳 中国地理書講読

（前期・後期）

＊地理学実習＊

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

＊大学院演習—地域の諸問題—＊

小林致広・石川義孝・田中和子・米家泰作

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

事務局から

<地理学談話会2013年度会計報告>

（2013年4月1日～2014年3月31日）

【資金会計】

<収入>

年会費 107,000

寄附金 0

利子 54

前年度繰越金 377,126

計 484,180

<支出>

運営への振替 94,970

郵便振替手数料 6,240

次年度への繰越 382,970

計 484,180

【運営会計】

<収入>

資金会計からの振替 94,970

秋季懇親会会費 33,000

春季懇親会会費 92,000

計 219,970

<支出>

秋季懇親会 30,266

講師3名交通費 17,000

OB交流会経費 0

春季論文発表会経費 92,000

会報・名簿等印刷費 5,000

会報製本費用 0

通信・文具等費 73,904

弔電・供花等 1,800

計 219,970

<計報>

前回の会報以降、次の方々がお亡くなりになりました（お亡くなりになったとのお知らせをいただいた方を含みます）。
謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（確認分、括弧内は卒業年、敬称略）

佐々木 高明 (1955 年卒)
 立入 哲 (1953 年卒)
 由比濱 省吾 (1952 年卒)
 高橋 誠一 (1969 年卒)
 大島 襄二 (1943 年卒)

勝村 (赤座) 眞知子 (1973 年卒)
 叶谷 房子 (1998 年卒)
 川合 大地 (1998 年卒)
 川添 和明 (1995 年卒)
 貴志 謙介 (1981 年卒)
 木地 節郎 (1949 年卒)
 北口 卓美 (1990 年卒)
 木村 宏 (1949 年卒)
 木村 善則 (2008 年卒)
 坂部 誠治 (1991 年卒)
 酒匂 幸樹 (2000 年卒)
 島崎 郁司 (1996 年卒)
 嶋野 浩一朗 (1997 年卒)
 清水 究吾 (1998 年卒)
 新谷 泰久 (1990 年卒)
 鈴木 伸国 (1988 年卒)
 田島 渡 (1948 年卒)
 田辺 賢一郎 (1949 年卒)
 都子 屋 (1940 年卒)
 中山 耕至 (1993 年卒)
 那須 久代 (1988 年卒)
 檜崎 (藤川) こず恵 (1998 年卒)
 南部 一寿 (1999 年卒)
 西井 (小林) 理子 (2002 年卒)
 西尾 正隆 (1970 年卒)
 西沢 仁晴 (1974 年卒)
 西山 隆彦 (1995 年卒)
 能勢 (朝倉) 正寛 (1962 年卒)
 野瀬 美咲 (2010 年卒)
 原 健太 (2003 年卒)
 福田 新一 (1971 年卒)
 古川 昇平 (2006 年卒)
 前田 奈実 (1999 年卒)
 松本 弘史 (1983 年卒)

＜住所不明者についてお願い＞

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は、談話会事務局までご一報ください。(数字は卒業年、敬称略)

池内 麟太郎 (1973 年卒)
 石角 強 (1970 年卒)
 石橋 弘嗣 (2006 年卒)
 石原 大嗣 (1997 年卒)
 石原 (林) 美歩 (1995 年卒)
 石村 裕輔 (1992 年卒)
 今井 平八 (1944 年卒)
 岩部 敏夫 (1991 年卒)
 上田 直人 (2009 年卒)
 内山 隆之 (1987 年卒)
 江崎 健治 (1992 年卒)
 遠藤 元 (1996 年卒)
 遠藤 正雄 (1978 年卒)
 太田 隆文 (1997 年卒)
 大野 宏 (1992 年卒)
 大山 晃司 (1995 年卒)
 岡本 靖一 (1967 年卒)
 岡本 美津子 (1987 年卒)
 興津 俊之 (1991 年卒)
 小口 稔 (1991 年卒)
 楓 雅之 (泰昌) (1945 年卒)
 片寄弘也 (2004 年卒)

御手洗 央治	(1993 年卒)
宮澤 博久	(2005 年卒)
保江 志帆	(2003 年卒)
山口 一郎	(1980 年卒)
山下 良	(1989 年卒)
山田 (児玉) 憲子	(1970 年卒)
山中 一高	(1991 年卒)
吉野 修司	(1995 年卒)
吉村 健志	(2002 年卒)
六嶋 美也子	(1993 年卒)
渡邊克己	(2004 年卒)

＜オープンキャンパス：2013年度の 報告と2014年度のお知らせ＞

2013 年 8 月に京都大学のオープンキャンパスが開催されました。文学部の見学・説明会もこの一環として、9 日に行われました。文学部の全体説明のあと、各自が希望する専修の研究室を訪問してもらいました。

2014 年度の京都大学主催の全学オープンキャンパスについては、

<http://www.kyoto-u.ac.jp/> をご覧下さい。

文学部の見学・説明会は、8 月 7 日 (木) の予定です。

地理学教室では、大学院の受験志望者や、中学高校の教員の方々、また、一般の市民の方にも参加して頂けるような見学会を 11 月 29 日 (土) に開催する予定です。詳細な日程や参加申込の案内は、地理学教室のホームページ、

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/geo-top_page/

に掲載する予定ですので、ご覧下さい。

＜2014年度秋季地理学談話

のお知らせ＞

本年は、下記のようなプログラムを予定しております。ぜひお越しください。

記

日 時：11 月 29 日 (土)

午後 1 時—5 時

場 所：文学部新館

◎教室見学会：午後 1 時より

◎OB 交流会：午後 2 時より

講師 朝山 博之氏 (1998 年卒)

本多 真太郎氏 (2007 年卒)

(文学部新館 地理学実習室)

◎講演会：午後 3 時半より

中野 雅博氏 (1969 年卒)

(文学部新館 地理学実習室)

◎懇親会：午後 5 時より

(文学部新館 地理学共同研究室)

＜地理学教室所蔵の

写真資料について＞

地理学共同研究室や総合博物館地理作業室のロッカーの中に保管されていた地理学教室関係者の古い写真が数百枚あります。

卒業生の方々に見ていただき、写真に関する情報のご提供や、整理方法のご教

示などをいただければと願っております。

どうぞ、お気軽に教室をお訪ねいただき、アルバムをご覧くださいませよう、お願い申し上げます。

☆一年あたり千円を目処として、それぞれの会員の方々に、談話会の運営経費へのご協力をお願いしております。随時、ご支援をお願いいたします。納入の際は、同封しております「郵便振替用紙」をご利用下さい。

＜「陳列館１００年展（仮題）」 のご案内＞

文学部陳列館の 100 周年を記念して、京都大学総合博物館で展覧会が開催される予定です。陳列館にゆかりの教室の一つとして、地理学教室からの出品も計画されています。ぜひ足をお運びくださいますよう、お願いいたします。詳細は、秋の談話会のご案内のところに、改めてお知らせします。

期間：2014 年 10 月末～11 月末

料金：大人 400 円

会場：京都大学総合博物館

京都大学文学部地理学談話会 会報 第 25 号

発行日 2014 年 5 月 15 日

発行者 地理学談話会

〒 606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 地理学教室内

Tel: 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

URL http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geography/geo-top_page/